編集後記

山折班の共同研究会が発足したのは平成五年四月のことである。わたしが日文研にはいったのは平成四年一〇月で、共同研究会に参加するのも、幹事をつとめるのもはじめてのことだった。とても不安だったが、メンバーがわりと若手中心だったことが唯一のすくいだった。

ところが、そうした不安は会をかさねるごとにふっとんでいった。というのも、いつごろからか、幹事として、ひとつのスタイルをつくることに成功したからである。いや、成功したというのは自分のおもいこみで、ほかの出席者にはずいぶんと傍若無人にうつったかもしれない。げんに、ゲスト・スピーカーできていただいたひとのなかには、この共同研究会のひどさをうったえたひともあったときく。

それはともかくとして、そのスタイルとはこうだ。ひとことでいえば、「踏み絵」というキーワードでしめすことができるかもしれない。幹事が司会をするという立場を利用して、発表とは直接かかわらない（と一般にはそうかんがえられている）キリスト教体験など、個人的体験を根ほり葉ほりききまくったのである。そのやりかたは、まるで「踏み絵」をふませようとする。出席者の一部にはそうかんじたかたもおられたようだ。さらに「踏み絵」をふませようとしたあげく、追い打ちをかけるように、あなたのバイアスはこうだ。だからあなたはこうした発表をしたのだ。と、いわんばかりにきめつける。どういうわけか、そうしたスタイルがある種の共同研究員にウケた。すくなくとも、ウケたとわたしが誤解するだけの反応があったのである。

すこしやりすぎだ。そうかんじることもたびたびあった。その反省で、「踏み絵」はとりさげ、ずいぶんおとなしくしていた日もあった。しかし、そんな日にかぎって、山折先生から「長田君。元気がないじゃないか。いつもの長田君らしくないね。」と激励をウケた。そのため、さらに図にのった。そのいきおいを持続したかたちで、今回の報告書でも、宗教とバイアスをテーマとしたが、いわば共同研究会のスタイルを、そのままもちこんだものである。

わたしにとっては、わすれがたい共同研究会であった。また、なんにんかの共同研究員にとっても、わすれがたい共同研

究会であったとしんじている。げんに、共同研究会報告としては異例の一〇〇枚以上をこえる原稿を提出してくれたかたもある。また、この報告書をまとめるにあたって、共同研究員のほとんどのメンバーが論文を執筆してくださった。それらがこの共同研究会の成功をものがたっているのではないだろうか。幹事として、研究代表者にならって、成功だったと自画自賛しておきたい。こんご、こうした共同研究会ができるかどうか。たとえわたしが共同研究会を主催したとしても、こうはできないような気がする。

さいごに、共同研究会代表者である山折先生、そして共同研究会に熱心に参加してくださった共同研究員の方々、すべてのかたの名前をあげることができないが、そのなかでとくに一名だけ名をあげると、この共同研究会への参加を機に、冗談なのか、一時のこころのまよいなのか、棄教（ではなく、帰郷だったのかもしれないが）をかんがえるようになったとまで告白してくれた、カクレキリシタン研究の第一人者である宮崎賢太郎さん、これらの方々に感謝のことばをささげ、編集後記としたい。

（長田記）